

今和次郎の服装研究家としての視点 -洋装化における日本の服装の転換期を背景として-

家の根本義ゼミ所属
1X08A140 本澤 由紀

今和次郎 服装研究 女性服装史
洋装化 スタイル 服装

1 研究背景

本研究の目的

今和次郎 (1888-1973) は大正から昭和にかけて活躍した人物である。今和次郎が活躍した当時の日本は、欧米から様々な文化や様式が輸入されたと同時に、関東大震災 (1923) や第一次世界大戦 (1914-1918)、第二次世界大戦 (1939-1945) によって庶民生活が一転した時代であった。欧米から輸入された新しいものが次々と現れる状況と、今までの生活が一瞬にして崩れ去ってしまうという状況下で、日本は大きな時代の転換期に属していたといえる。この時代と同時期に急速に発展したのが日本庶民における普段着の洋装化である。和装から洋装への転換は一般庶民にとって最も影響が大きかったものの1つであり、約1900年近く続いた普段着としての和服が、洋服が登場してからわずか70年の間で日常生活からほとんど姿を消すことになったのである。^{*1}

今和次郎が主体としていたのはあくまでも建築であり、彼は建築家であった。^{*2} 日本における洋装化は、言うまでもなく日本開国後の西洋からの文化の輸入が大きく関係している訳だが、さらに服装と建築を並列して扱うという感覚も、西洋からそのような思想が輸入されるまでは当時日本では見られなかった。石山彰が「建築と服装の両者を同次元で論じられるという学者は、氏をおいて他には求められなかった」と述べているように、^{*3} 今和次郎は西洋文化の影響を受けて、服装と建築を並列させて論じた先駆者であるといえる。

以上の点から今和次郎の《服装研究家》としての一面は軽視できない点であり、建築家としての面と同様に深く論じられるべきであると考えられる。

以上から、本研究の目的は、和装から洋装への転換期を向かえていた日本の時代背景において、今和次郎の服装研究家としての一面を明らかにし、建築を本職とする今和次郎が服装研究家としてどのような視点をもっていたのか明らかにすることである。

既往研究

今和次郎は民家研究や考現学、家政学等、様々な分野で活動していたため、既往研究も様々な分野のものが見られる。しかし服装に関する活動に関しては主眼をおいた既往研究はない。川添登氏^{*4}の著書『今和次郎—その考現学』^{*4}で網羅的に今和次郎の活動を追っており、その中では「欧州の服装や家具は舞台の時代考証のため」^{*5}と述べているに留まっている。この点に関して黒石いずみ氏^{*6}「建

築外」の思考 今和次郎論』^{*7}で「彼の建築学的論考とは無関係なものと後世代の研究者には思われてきた。」と指摘されている。黒石氏は今和次郎の思考をアドルフ・ロースと対比した上で、最終的には服装を流行との関係から論じている。いずれにおいても、今和次郎の服装研究家としての側面は明確に示されてはいない。

2 日本の洋装化

2-1 明治維新後～第一次世界大戦～第二次世界大戦

日本の洋装化の変遷

日本にはじめて西洋の洋服が輸入されたのは19世紀後半であるが、しばらくの間は洋装は、官僚の制服や鹿鳴館時代に代表されるような上流階級のものであった。一般庶民に洋装が広まり始めるのは、和服に比べて、その実用的な価値が見出されてからである。その背景には、第一次世界大戦後の生活改善運動の影響が大きかった。第二次世界大戦の戦況が悪化するまでは働く者の洋装と、家で着る和装とで区別されてる形で洋装は一般にも普及していた。

それが戦況の悪化によって洋服は贅沢品とされ、国民服とモンペの着用が義務化される^{*8}とともに、洋装は市場では見受けられなくなっていく。

一般庶民の洋装化に大きく影響を与え、今和次郎が服装研究が生きたから第二次世界大戦周辺の時期を中心に、日本における洋装化の歴史を明らかにした。

2-2 雑誌『スタイル』



図1 創刊当時の『スタイル』1936年8月号表紙(左)と

廃刊当時の『スタイル』1941年9月号表紙(右)

『スタイル』は昭和11年(1936)6月から昭和16年(1940)9月まで発行された月刊誌である。この雑誌は日本初の女性ファッション雑誌として創刊され、第二次世界大戦の戦況の悪化を理由に、日本が真珠湾攻撃を始める直前の1941年9月号をもって改題となる。編集長は宇野千代^{*9}で、今和次郎も1937年3月から

の計4号に記事を掲載している。^{*10}

この雑誌は創刊当時と廃刊当時ではその表紙や誌面などに大きな違いが見られる。本研究では掲載されているファッションモデル（日本人、外国人）を被写体とした写真のカット数や誌面を分析することによって、社会的背景と一般の服装の関連を読み取った。

3 1930 年海外留学とそれまでの契機

今和次郎が服装研究をする契機として、舞台芸術との出会いが彼に服装史研究を始める機会を与えた。美術大学卒業後、早稲田大学の佐藤功一郎の助手として師事していたが、そこで芸術座立ち上げ時に舞台美術に関わった。さらに講師として受け持った講義でも舞台美術を扱ったことが西洋の服装史を研究し始める契機を与えた。

さらに今和次郎の服装研究家へ道を決定付けたのが1930 年からやく10 ヶ月間に渡る欧米出張であった。この期間中、彼はあらかじめ一般に公開されることを目的として『欧州紳士淑女以外』^{*11}と題したスケッチを描いていた。ここに描かれているのは「紳士淑女以外」の駅員や売り子などである。モチーフに選ばれた人物たちに目を向けてみると、日常を過ごす自然体の彼らを、今和次郎は残そうとしていたと考えられる。



図2 今和次郎「欧州紳士淑女以外」

4 今和次郎の服装研究

まず、今和次郎と当時接触していた杉野芳子^{*12}などの関係者の発言や掲載雑誌の分析から、今和次郎の服装研究家としての一面は服装史研究の第一人者として確立していたことが分かった。さらに、著書の『服装研究』^{*13}と『女性服装史』^{*14}の構成はまとめ方の視点に相違があり、『服装研究』は種類ごと分解して総括的にまとめ、『女性服装史』は服装の歴史を時代ごとに体系的にまとめられていることが分かった。

また、今和次郎の服装研究として最も特徴的なのは、「布地をからだにまといつけた時代」「裁断を工夫した時代」「装飾に巧んだ時代」「流行に左右される時代」と独自の視点で4つに部類した点である。今和次郎は、「布地をからだにまといつけた時代」で服装を身体との関連から美的に読み取り、「裁断を工夫した時代」で服装を建築と関連させて構造的に読み取っていたと考えられる。また、「装飾に巧んだ時代」では人工的な「造形主義」を批判していた。

日本の洋装の歴史は近代以降に欧米から輸入され始まったものであるため、「流行に左右される時代」に始まり、

続いていく。日本の洋装の歴史は「流行史」ととらえられる。

5 考察／服装研究家・今和次郎の視点

今和次郎は「装飾を巧んだ時代」において、人工的、表面的な「造形主義」を痛烈に批判していた。それに対して、着目されるのは、「体に布地をまといつけた時代」で服装を身体との関連から美的に読み取っていた点である。「体に布地をまといつけた時代」は、人工的な造形は何一つなく、身体其自然のままの形だけが表面に現れている。それに対して、「装飾を巧んだ時代」は故意に身体を強調させ、作り上げられたものであり、人間の身体「自然の美」というものは感じられない。また、今和次郎が海外留学をした際にスケッチしたものは、どれも「日常を過ごす自然体の人物たち」であり、今和次郎はこれをスケッチに留めて残そうとしていた。

ここからうかがえる今和次郎の視点とは、人間の自然体の美しさ、ありのままの姿に目を向けているというものである。今和次郎が生きた時代は、欧米化、第一次世界大戦や第二次世界大戦などの相次ぐ戦争、それにともなう生活改善運動など、社会的背景が目まぐるしく変わっていた。このような時代背景を受けて、洋装と和装は一般庶民によって、それぞれの価値を見出されようとしていた。

この混沌とした時代の中で、真に今和次郎が目向けていたものは、人間そのものにある自然の美しさだったのでないだろうか。

6 結論

日本の洋装化が進んだ背景には、政府による積極的な洋装の導入、第一次世界大戦後の生活改善運動、第二次世界大戦の戦況の悪化による、社会的背景の影響が大きかった。今和次郎はこの時代を生きていた。

彼は海外留学の際に「紳士淑女以外」をモチーフにしたスケッチを残したが、これらの人物たちに目を向けてみると、日常を過ごすありのままの姿が浮び上がる。

さらに服装研究家として今和次郎は、人工的な造形を批判し、布地と身体との関連から服装を美的に読み取っていた。

1. 昭和女子大『近代日本服装史』（近代文化研究所、1971）
2. 今和次郎著『服装研究』（長谷川書店、1947）の冒頭部分で、自らの「専門事項は建築である」と述べている。
3. 今和次郎著『女性服装史』（1948、長谷川出版）石山彰の解説。
4. 川添登（かわぞえ のぼる）。早稲田大学文学部哲学科を経て同大学工学部建築学科卒。建築評論家。
5. 川添登『今和次郎—その考現学』（リポート、1987）
6. 黒石いずみ（くろいし いずみ）。東京大学工学部建築学科、同大学院博士課程卒。後米ペンシルヴェニア大学Ph.D.取得。
7. 黒石いずみ『「建築外」の思考—今和次郎論』（ドメス出版、2000）
8. 昭和15年11月1日勅令725号「国民服令」。
9. 宇野千代（うの ちよ）。山口県岩国市生まれ。岩国高等学校（現・山口県立岩国高等学校）を卒業。教員を経て1919年に藤村忠（ふじむら・ただし）と結婚するが、1921年に「時事新報」の懸賞短編小説に「脂粉の顔」で1等当選し、作家としてデビュー。着物デザイナー。
10. 1937.3「スカートの話」、1937.4「いかり肩の話」、1937.5「バラソルの話」、1938.6「靴の話」
11. 図按科で住居学と西洋文様史の講義を受け持つ。
12. 杉野芳子（1982—1978）は、大正15年（1926年）に、現在のドレスメーカー学院の前身にあたる杉野芳子ドレスメーカーカースクールを設立、昭和7年（1932年）に杉野学園を設立しており、当時有名なファッションデザイナー兼教育者。
13. 今和次郎『服装研究』（長谷川書店、1947）
14. 今和次郎『女性服装史』（相模書房、1948）



今和次郎著『女性服装史』（長谷川書店、1947）（左）



今和次郎著『服装研究』（相模書房、1948）（右）

* 早稲田大学創造理工学部 学部4年

* Undergraduate student, School of Creative Science and Engineering, Waseda Univ